## 伊能忠敬の化身 第二 回

香取 淳



## 【前号までのあらすじ】

地図の完成を見ることなく息を引き取った。 十数年をかけて天地の測量を終えた伊能忠敬は日本 しかし、

地図御用所でもあった八丁堀の家は去り難く、秘かに

家蜘蛛となって天井に留まる。

やがて地図が完成、

な地図に紛れて入城した忠敬の化身は、将軍家斉の上 た。その文庫にある日、目の青い異人―景保に導かれ 覧が済むと、紅葉山文庫(幕府の公文書館)に住みつい 文方の高橋景保らの手で江戸城に運び込まれた。 膨大

軍の外科少佐として日本を調査する特命を帯びてい 先ず、 シーボルトはドイツ人であったが、オランダ 伊能図をめぐる物語が展開してゆく。

たシーボルトが入ってきた。

以降、

化身の目から見た

た。

医師の身分を利用して、

出島から外出することを

81

五、江戸逗留を阻止する多紀派の謀略

治経済、文化・工芸等々の情報を収集していた。たちに医学や博物学を教える傍ら、彼らから日本の政許され、鳴滝塾で多くの弟子を集める。そして、弟子

に、 うちに、 に紅葉山文庫に入る約束を取り交わす。そうこうする 頻繁に会い、 土の情報が欲しかったので、北方に詳しい最上徳内と 文方の高橋景保らであった。 島津重豪らの親蘭大名、 すがら各地の緯度・経度、 までの長い旅は情報収集に絶好のチャンスで、 戸参府に商館長スチュルレルらと共に出掛けた。 江戸に着くと、定宿の長崎屋には多くの客が来訪。 来日二年後の正月に、 江戸参府後も引き続き江戸に逗留する工作を依 ほぼ延長は可能と知らされていた。また、 将軍拝謁の 高橋景保とは 日が通知されてきた シーボルトは四年に一度の江 蘭方医の桂川甫賢、そして天 海峡などの測量を断 『世界周航記』と引き換え シーボルトは来訪者たち 北方領 彼は道 江戸

寿館は、 学館へと改められる。その折に、 学館』 年(一七九二)に幕府の医官養成校に昇格し、 乗り越えて漢方医を輩出し続けていた躋寿館は、 講堂を焼失してしまう。 紀元孝が創設したものの十年も経たないうちに大火で 0 紀派と呼ばれるのは何故であろうか? 6 元悳が私財を投げ売って再建を果たした。幾多の苦難を 奥医師たちであった。 し進める一方で、 前身が躋寿館という私塾であったことに起因する。 れて医学館長は多紀氏の世襲と定められた。 蘭方医や親蘭大名たちがシー で教育を受けた漢方医の総称であるが、 今から六○年ほど前に将軍吉宗の信任を得て多 窮地に追い込まれたのは 多紀派というのは幕府直轄の しかし、元孝を継承した多紀 ボ 創設以来の功績が報 ルト それは、 . О 江戸逗留を推 [多紀] したが 彼らが 名称も医 寛政 医学館 派 『医 炣 躋 多  $\mathcal{O}$ 

医であり、多紀派とも呼ばれる所以でもある。て、医学館の出身者は誰もが多紀氏の薫陶を受けた漢方

多くの親蘭大名もシーボルトの味方についている。 (内科)を独占し、奥医師としての格式や待遇にも大きな 蓋が付けられていた。したがって、桂川家を代表とする が付けられていた。したがって、桂川家を代表とする が付けられていた。したがって、桂川家を代表とする 世を突き撥ねるだけの力を有していた。しかし、今回は 出を突き撥ねるだけの力を有していた。しかし、今回は 出を突き撥ねるだけの力を有していた。しかし、今回は 出を突き撥ねるだけの力を有していた。しかし、今回は がるの親蘭大名もシーボルトの味方についている。

めていたのである。そのような折に、シーボルトが江戸掲して以来、西洋医学への関心や憧憬が高まり、猛威を振るう天然痘に対しても、西洋では既に種痘という方法振るう天然痘に対しても、西洋では既に種痘という方法加えて、半世紀ほど前に、杉田玄白らが解体新書を上

点に立つ多紀派の権威や地位も崩落する恐れが多分にが起こるか? 漢方医への評価や信頼は低下し、その頂に留まって患者を診療したり種痘を行ったりしたら何

あった。

多紀派の中でも最高位の薬典頭や、それに次ぐ地位に多紀派の中でも最高位の薬典頭や、それに次ぐ地位にある奥医師たちは膝を突き合わせて対策を練った。最もおい。しかし、ただ指を咥えて見ているわけにもゆかもない。しかし、ただ指を咥えて見ているわけにもゆかず、連日連夜「何か良い方策はないものか……」と思いばんでいた。そのような折に知恵者の一人が、「かくなる上は、お美代の方に動いて貰うしか策はありませんな」と言い出した。

側室で、大奥において絶大な権力を奮っていた。彼女お美代の方というのは、家斉の寵愛を一身に集める

とに、 ともいわれる藩の借金を踏み倒そうとしたり、 放さず、薩摩藩の赤字財政を立直すために、五百万両 いた。さらに藩政は孫の斉興に譲ったものの実権は手 肴でもてなす策略家で、「高輪下馬将軍」と揶揄されて も呼ばれ、名だたる大名や旗本たちを招いて豪勢な酒 を送っている。三田にある薩摩屋敷は の岳父であることをよいことに、やりたい放題の日 た。それというのも、茂姫の父である島津重豪は将 側室との折り合いが悪く、互いにいがみ合うことは珍 るかも……と多紀派は考えたのである。 方をうまく利用すれば、 とを乞い願って幕政に介入をしている。そのお美代の は側室でありながら政に関心が高く、家斉に多くのこ しくないが、二人の場合は特別に対抗意識が強かっ 家斉の正室である茂姫もまた政に関わることが お美代の方とは日頃から対立していた。正室と 将軍の岳父をも上回る力にな 「高輪御殿」と 都合がよいこ 清国と 軍 Þ

っていたので、将軍に就いた十五歳のときから、見て将軍になれたのは実父徳川治済と岳父重豪のお陰と思の横暴ぶりは目に余るものがあったが、家斉は自分がの抜け荷(密貿易)を半ば公然と行ったりしていた。そ

見ぬ振りを貫いてきた。

清茂の養女として大奥へ奉公に上がる。 中野家の屋敷に預けられて教育や躾を身に着け、 家斉の側室にすることを思いつく。そこで、お美代は 将軍家斉の目に留まると考えた清茂と日啓は、 時から大変な美貌の持ち主で、大奥に上がれば必ずや 寺であったことが縁で二人は結びついた。お美代は幼 泉院という寺の住職になるが、 養父は家斉の側近であった中野清茂であるが、 期を迎えた家斉から格別の寵愛を受けていた。 は仏性寺の祈祷僧であった日啓である。 方、お美代の方は、まだ三十歳前の若さで、 中野家の菩提寺が仏性 日啓は後に智 実の父 彼女の 彼女を

に女子の場合は婚姻により親族を増やして一族の繁栄 当たる。 の時に出産している。その溶姫は長じて加賀藩の前 次に産まれた仲姫は夭折したが、三女の末姫を二十歳 を確たるものにしたいという思惑があったのである。 の血筋から一人でも多くの将軍を輩出すること、さら 父の治済から子孫を増やすように命じられた。一橋家 と陰口を言われていたが、 も及ぶといわれるが、 たときのことである。将軍家斉には、 斉に見染められて側室となった。 人の側室がいて、彼女らに産ませた子女は五十三人に 側室となったお美代の方は十六歳で長女の溶姫を、 清茂と日啓の目論見は的中し、 御三卿の中から初めて将軍の座に就いた家斉は、 家斉には側室と子女が多く、 お美代の方は十三番目の側室に 単に好色であった訳では 彼女が十五歳になっ たちまちお美代は家 少なくても十六 オットセイ将軍 田 な

> その一つが実の父日啓の格別の厚遇であった。日啓が ずれも一橋徳川家の思惑に沿った縁組であることは言 その小寺がいつの間にか法華経寺の の山門脇にある支院で、 住職を務める智泉院は日蓮宗の大本山・中山法華経寺 家に輿入れした溶姫の屋敷であることを示している。 その一つが今でも残る東大の赤門であり、かつて前田 うまでもない。 で格上げされていたのである。 まり法華経寺における祈祷を受付け、 るように、婚家の門を朱色に染めることを指示した。 お美代の方は家斉に何かと「おねだり」をしたが、 家斉は数多い姫の嫁ぎ先が一目で分か さほど格式は高くなかった。 『御用取次所』、つ 差配する寺にま

地はまったくなかった。そこで日啓は、日蓮宗大本山との繋がりが弱く、増してその支院が祈祷所となる余台宗の上野寛永寺である。日啓が属する日蓮宗は幕府台宗の上野寛永寺である。日啓が属する日蓮宗は幕府

家

末姫は安芸国広島藩の浅野家に嫁いでいる。

い

入れ知恵をして、将軍家斉に鶴の一声を上げさせたの 御用取次所とする一計を案じる。そして娘のお美代に の法華経寺を幕府の祈祷所に加えさせ、智泉院をその

そのような力を発揮するお美代の方に、多紀派の医

であった。

師たちは接近を試み、工作に取り掛かった。まず、

お

り代わりにオランダ商館長の将軍謁見の話題を投げ掛 美代の方に覚えの良い奥医師を何人か選び出し、代わ

で、最も親しい一人がシーボルトの江戸逗留の話を切

ける。そして、お美代が謁見の概要を把握したところ

り出した。

「お美代様、商館長に同行してきたシーボルトという

医官のことですが、実は上様の謁見が終わった後も江

戸に留まりたいと願い出ております」

「何と言うことを、異人が江戸に留まることはご法度

じゃ」

「左様でございます。 しかし、ご法度と知りながら、

西洋医術で患者の診立てや療治をさせたいと多くの蘭

方医たちが後押しをしているのでございます」

「蘭方医の願いごとなどは聞くに及ばぬ、ご法度だと

「そうしたいのは山々でございますが、将軍の岳父、 蹴しなさい」

島津の御老公が後ろ盾に……」

「なに!

あの強欲なご隠居が絡んでおるのか?」

おりまして、今回の江戸逗留の話も重豪様が強く推し 「はい、シーボルトという異人は御老公と深く通じて

ているのでございます」

「ご隠居の蘭癖はよく承知しておるが、 何故、 異人の

江戸逗留まで推すのじゃ?」

んでおりますが、その異人を持ち上げる御老公は、恐 「異人は、 奥医師になって江戸城に入り込むことを望

らくオランダとの交易を企んでいるのではないかと…

 $\vdots$ 

奥医師は、江戸の御典医たちが囁いている話を持ち

出し、さらに島津藩の困窮した財政の立て直しへと結

び付けてゆく。

「島津藩の抜け荷は目に余ると聞いておるが、まだ足

りないと言うのか?」

上回る勢いで、清国からは薩摩藩を取り締るようにと「はい、清国との抜け荷は出島における幕府の取引を

依頼の文が届いているほどで」

「そうか……」

「加えて御老公は、シーボルトを手先として大奥に入

り込み、御台所のお力も借りて思うが儘に大奥を操ろ

うとしている節もございまして……」

たまるものか」 「ならぬ! 重豪と御台所にそんな好き勝手を許して

「左様でございましょう。ですからお美代の方様のお

力を」

「断じて許せぬ! シーボルトやらは謁見が終わった

ら、即刻、江戸払いじゃ」

多紀派奥医師のご注進が家斉の岳父と御台所のこと

た。そして、時を置かず将軍家斉はもとより、気心のに及ぶと、側室のお美代は火が点いたように怒り出し

く。彼女の影響力は極めて強く、シーボルトの江戸逗知れた老中や若年寄りたちに次々と工作を仕掛けてゆ

留を容認する空気は日を追うごとに薄まり、蘭方の奥

医師や親蘭大名たちのシーボルトを推す声も将軍まで

届かなくなってきた。

のスチュルレルから長崎奉行を介して願い書が将軍にさらに、追い打ちをかけるように、オランダ商館長

留を許可しないように」と認められていた。シーボル奏上されてきた。その書面には、「シーボルトの江戸逗

たちの意を大いに強めたことは申すまでもない。 願い書は、 トの上司で、 多紀派の奥医師や江戸逗留に異を唱える者 しかも謁見の当事者である商館長から 0

## 六 将軍謁見の裏で

きた。 う。 ビロードの礼服に身を包み、 長椅子に座り、 出迎えた。 長崎奉行の高橋重賢や大目付、作事奉行などが一行を は良く、どこからともなく小鳥のさえずりが聞こえて 平越前守など譜代大名の屋敷が立ち並んでいる。天気 は三月二五日の早朝に、 大奥の動きを知る由もないシーボルトと商館長たち 内濠に架けられた常盤橋門から城内に入ると、 番所がある広場にでると正面に大手門が見え、 駕籠を降りた一行は、赤い毛氈が敷かれた 振舞われた日本茶を儀礼的に飲んだ。 定宿の長崎屋を出た。 駕籠に揺られて城に向 一行は 松 カコ

> 門を潜り抜けた。そこから左に月見櫓や富士見櫓を 行は役人たちに案内されて大手門、次いで大手三 中雀門を入 商館長

る。 で、 り。 諸大名、そして下段は若年寄や奉行の席である。 ぎず、オランダ国の正式な使節ではないという理 から指示された商館長の席は、 施されている。上段は将軍とそのお供、 井や襖は錦絵で彩られ、 言われていたが実際には四百畳ほどであった。 たちは皆目見当がつかなかった。 たものの大小さまざまな部屋が連なっていて、 ると、そこから先は本丸の表御殿である。城内に入っ 見ながら上って行くと本丸の正面に来る。 将軍との謁見の場は大広間で、 畳の下段に上がることも許されなかったのであ 商館長スチュルレルは東インド会社の一社員に過 欄間には精巧な透かし彫りが 屈辱的な回廊の板張 その広さは千畳敷と 中段が老中や その天 奉行

をさせられた。深々としたお辞儀を何度も仕込まれ、 控えの間で待つあいだに大広間は大名たちで埋め尽く されてゆく。スチュルレルも奉行に導かれて回廊の板 はさらに廊下の末席があてがわれた。将軍が座る上段には進物台が設けられていて、オランダからの献上品 が山のように積み上げられている。「御成り!」の合図で商館長は板の間の定位置に就いて背筋を伸ばす。「シーッ!」の声に合わせて大名たちも定められた位置に座る。そして、大広間の全員が深々とお辞儀をした頭座る。そして、大広間の全員が深々とお辞儀をした頭座る。そして、大広間の全員が深々とお辞儀をした頭座る。そして、大広間の全員が深々とお辞儀をした頭座る。そして、大広間の全員が深々とお辞儀を何度も仕込まれ、

がるまで顔を上げる者はいなかった。何処からともなばらく続いた。誰もが動かず、数分後に将軍が立ち上一同が深々と頭を垂れ、物音ひとつしない静寂がし

ちには簾の向うにいる将軍の影さえ見ることができな長に祝意を示したりしたが、廊下にいたシーボルトたる。中段にいた大名たちが板の間に降りて来て、商館く拍手が沸き起こり、謁見はあっけなくお開きとな

かった。

奉行らに命じられ、

スチュルレ

ルは謁見の予行演習

る役目を担っていたので、オランダの使節に同行する のとき、謁見の場にいた高橋景保が商 が外に出る。このとき、謁見の場にいた高橋景保が商 が外に出る。このとき、謁見の場にいた高橋景保が商 が外に出る。このとき、謁見の場にいた高橋景保が商 が外に出る。このとき、謁見の場にいた高橋景保が高 で過路を引き返し、大手三の門の出口を右に折れる。 を通路を引き返し、大手三の門の出口を右に折れる。 を通路を引き返し、大手三の門の出口を右に折れる。

よく見え、とりわけ江戸湾の眺望は素晴らしかった。抜けた。二重橋に差し掛かると江戸の町とその近郊が彼らは濠沿いにしばらく進み、西丸の大手門を潜り

ことはごく自然なことである。

一行は西丸に入ったが、お目当ての世子はまだ本丸から戻っていないという。この日の午後は御定式日といら戻っていないという。この日の午後は御定式日といの後は奉行らに薦められて西丸の大奥に赴くことになの後は奉行らに薦められて西丸の大奥に赴くことになった。

一方、シーボルトは世子との面会には興味がなく、 高橋景保と約束をした紅葉山文庫に早く行きたくて堪 らない。はやる心で景保の表情を伺うが、景保は何食 りない。はやる心で景保の表情を伺うが、景保は何食 の入口まで来ると立ち止まり、周囲の役人や商館長 と約束をした紅葉山文庫に早く行きたくて堪

る。

す。それ故、大奥には同行できないが、よしなに頼「拙者はこれからシーボルト博士に霊廟をお見せ致

む

繰りに開け、

武器・武具の図、

江戸城内の見取図さら

役人や商館長たちは驚いたが、書物奉行である景保に異を唱える者はいなかった。景保は大奥の入り口をは異を唱える者はいなかった。景保は大奥の入り口をを客人に参拝させるので、通すように」と命じて難なく通り抜けた。この月の紅葉山文庫の責任者は景保でく通り抜けた。この月の紅葉山文庫の責任者は景保でく通り抜けた。この月の紅葉山文庫の責任者は景保でなったので、身分の低い門衛たちは、書物奉行である景保と人や商館長たちは驚いたが、書物奉行である景保

り、 に に白壁の御宝蔵が立ち並ぶ敷地がある。  $\mathcal{O}$ 庫 の門を外した。そして、 シーボルトを誘い込み、 霊廟へと続いている。 裏門に隣接する歴代将軍の霊廟のあいだを折 鳥居を二つ潜り抜けると上り坂が初代将軍家康 その霊廟がある紅葉山 二階と一階にある桐箱を順 御宝蔵 の端に建つ紅葉山文 景保は [の右脇 敷 れ曲が 地内 公

ので、譲ることは出来かねます」とオランダ語で答え問い掛けてくる。しかし景保は、「すべて禁制の品々な前では、「複製図が手に入らないものか」と興奮気味に前とのに見入っていたが、伊能図や北方領土の絵図のに伊能図等々を見せて回った。シーボルトはその一つ

続けた。

景保は、熱心に閲覧するシーボルトを急かしながら関を要した。二人が西丸の大奥に戻ったとき、商館長とビュルガーは女官たちの求めに応じて装飾品のブロとビュルガーは女官たちの求めに応じて装飾品のブローチや指輪、帽子などを広げている。シーボルトも何ーチや指輪、帽子などを広げている。シーボルトも何きわぬ顔で加わり、懐中時計などを取り出して女官たちに見せた。

敷を訪問、定宿の長崎屋に帰り着いたのは夜の九時過一行は長居をした大奥を辞して、老中や若年寄の屋

ぎであった

た。 り切っていたのである。 島での交易の権利を守るためには仕方がない儀式と割 と嘲笑っていた。彼は、オランダにだけ認められた出 され深いお辞儀を強いられたが、 ば江戸を発つことになるので、 本丸に入り、 と町奉行の家を訪問、 れていた。商館長のスチュルレルは再び板の間に座ら は異人が珍しいこともあってか、 し出した。あいにく寺社奉行はいなかったが、 は翌二六日である。この日は本丸には入らず寺社奉行 オランダ使節の登城は通算三回行われたが、 最終の登城は二八日で、 大広間に案内される。 型通りの挨拶の後に献上品を差 初回と同様に大手門から お別れの意味も込めら 心中では『猿芝居』 家族で出迎えてくれ 使節は謁見が済め 町奉行 口

奉行に、そしてスチュルレルへと手渡されると商館長使節に命令書が手渡された。その書状が老中から寺社謁見の最終日には恒例により、将軍からオランダの

の傍にいた大通詞が大声でオランダ語に通訳を始め

た。

一、オランダ人は今後も長崎に渡来し、出島で交易す

ることを認める。

二、ポルトガル人と交わってはならない。

二、キリシタンを船に乗せてはならない。

5、ポルトガル人の近隣諸国における行いをすべて報

告するように。

五、日本に来航する唐船を拿捕しないこと。

六、ポルトガル船と遭った場合は、遭った国と日時を

長崎奉行に文書で報告すること。

七、琉球国は日本に属するので、琉球の船は大小を問

わず拿捕してはいけない。

たが、幕府の時代錯誤ぶりには驚かされた。まず、命シーボルトは廊下の末席で大通詞の言葉を聞いてい

令書の宛先である『オランダ東インド会社』は前世紀

ポルトガル人との交流を禁じ、同国の近隣国における末(一七九九年)に破産して、今は存在しない。さらに

行動や船の動きを報告せよと言うが、かつて世界を席

巻したポルトガルはスペインと共に衰退して、いまや

したところで何の意味も為さないが、これまで謁見を

見る影もない。そのポルトガルの動きを幕府に報告を

してきた商館長たちは、いったい何を伝えてきたので

あろうか……。

しかし、命令書の朗読が終わった後のスチュルレル

「相分かりました。これを印蘭政庁および東インド会の一言で、シーボルトの疑問はきれいに消え去った。

社に申し伝えます」

かったのである。 したり、訂正したりは一切しなかった。命令書をそのしたり、訂正したりは一切しなかった。命令書をその

の時と同じように拍手が沸き起こった。

ュルレルが板の間で深々とお辞儀をすると、また初回までの通行証が与えられた。それらを受け取ったスチモの時服四十着が、次いで老中から江戸より長崎

儀式はこれで終わり、

使節に幕府より返礼の品とし

たが、 った。 将軍を頂点とする統治の仕組みと重臣の数や顔ぶれ のチャンスであった。江戸城内の構造や警固の状況、 商館長のお供で何の役割もなかったが、彼の裏の任務 いたが、一行が定宿に帰り着いたとき、 して大手門から城外に出る。 お別れの挨拶をして、ここでも返礼の品を受け取 -機密調査官―としては幕府の中枢部に入り込む絶好 謁見を終えた商館長らの一行は西丸に回り、 彼らは再び二重橋を渡り、 大役を果たし終えた商館長は安堵して寛いでい シーボルトには気を緩める暇はない。 朝から数時間以上経って 濠に沿った道を引き返 陽はまだ高 謁見時は 世子に カコ

大手門を出るときには、景保とその日の夜に会う約束先ずは紅葉山文庫に入ることに成功している。そして機密文書については、書物奉行の景保と親密になり、機密文書とりわけ地図類など、他では手に入らない情機密文書とりわけ地図類など、他では手に入らない情

を取り交わしていた。

全図二 二人だけの密談である。 れ、 た。 界余話附図』などである。 図』、『武器・武具の図』、伊能忠敬の『大日本沿海輿地 トは次の資料を提供してくれないかと切り出した。そ の資料とは、『江戸御城内御住居之図』、『江戸御見附略 午後の七時を過ぎたとき、 早速話し合いを始める。 待ち兼ねていたシーボルトは自室に景保を招き入 間宮林蔵が関与した『東韃地方紀行』 簡単な挨拶の後で、シーボル もちろん通詞は伴わず、 景保が長崎屋にやってき 『北夷分

「そんなにも多くの資料を、よく覚えていましたね」

「いや、メモです。 私は大事なことは必ずメモを取 ŋ

ますから」

シーボルトは掌中のメモを見せながら、景保に答え

た。

「大日本沿海輿地全図は見事な出来栄えですが、北と

球が入った地図。あなたなら簡単に出来ますよね。 南の領土が抜けています。私が欲しいのは、樺太と琉

「ウーム、できないことはないですが……」

景保は呻くように呟き、険しい表情で腕組みをし

た。 品ばかりである。もはや博物学の研究とはかけ離れ シーボルトの要求は余りにも多く、しかも禁制の

付いた景保は、 別の目的があることは疑う余地もない。それに気 シーボルトを紅葉山文庫に連れて行っ

たことを後悔した。

ルの 「グロビウス、その代わりに、 『世界周航記』を提供しますよ。さらに『蘭領印 私はクルーゼンシュテ

度の地図』と『オランダの地理書』も付けて」

シーボルトは、景保が世界周航記を熱望しているこ

とをよく知っていた。その世界周航記を餌にちらつか

せて、 無理な要求を突き付けてきたのである。

禁制の品を異人に渡したことが明るみに出たときには 景保は腕を組み、口を一文字にして考えた。

重罪に問われる。しかし、それであってもクルーゼン

なる。 り世界の情勢が分かるし、 シュテルの『世界周航記』は手に入れたい。それによ 外国情報を収集する任務を担っていた景保は海 列強国の力関係も明らかに

外の状況、とりわけ幕府が知りたがっているロシアの 動きを把握したいと常々考えていた。

「ドクトル・シーボルト、 あなたの要求は分かった。

しかし、いずれも禁制の品ばかりなので、今すぐには

答えられない」

「難しいことは私にもよく理解できる。返事は後でも

よいから前向きに考えてくれ」

景保はシーボルトの言葉に小さく頷き、重い足取り

で長崎屋を後にした。

翌二九日に、景保はまた夜闇に紛れて長崎屋を訪ね

むことにしたのである。彼が手にした風呂敷包みに

悩みに悩んだ末に、

シーボルトの要求をすべて呑

江戸城内の見取り図と、武器・武具の図の写しが

入っていた。景保は、 部下の画工たちに命じて模写さ

せたものであった。

「ドクトル・シーボルト、 あなたが求める江戸城内の

沿海輿地全図』と『東韃地方紀行』については模写に 見取図と、武器・武具の図の写しを持参した。『大日本

> 時間が掛るので、 後日あらためて奉行便で出島にお送

りしよう」

「おー、グロビウス、よくぞ決断してくれた!

有難

私からも約束した書物を進呈しよう」

シーボルトは満面に笑みを浮かべ、書棚から世界周

航記や蘭領印度の地図、オランダの地理書などを取り

出して、テーブルに並べる。

「これが世界周航記ですね。有難う!』 景保も渇望していた著書を手に取って、 強張ってい

た頬を緩めた。そして二人は情報交換のために、これ

このとき景保が持参した江戸城内の見取図は、 からも密に連絡を取り合っていこうと約束を交わす。 急いで

粗悪なものであった。また、武器・武具の図も出来映 図工に模写させたものであるため、所どころ不明瞭な

ら借り出させる。そして評判が高い絵師の葛飾北斎に えが悪かったので、シーボルトは後日、 実物を景保か

会って、オランダ製の紙を手渡して彩色模写を依頼し

ている。

多紀派が蘭学派を巻き返して将軍や老中たちもその方るなり、「江戸逗留の延長が難しくなってきた、漢方の定宿に駆けつけてきた。甫賢はシーボルトの部屋に入月が替わった四月二日に、桂川甫賢が息を切らせて

る力を思い知らされ、驚きを隠せなかった。

知る術もなかった。

知る術もなかった。

知る術もなかった。

知る術もなかった。

知る術もなかった。

知る術もなかった。

知る術もなかった。

と言うのである。オランダの使節がある。

はいたシーボルトは落胆した。将軍に謁見する前まではいた。

おしているに違いない……とシーボルトは憶測する。しているに違いない……とシーボルトは憶測する。

なぜ急に雲がしているに違いない……とシーボルトや甫賢たちにはかし、それが何であるかはシーボルトや甫賢たちには知る術もなかった。

一方、景保は将軍謁見を機に、西館長のスチュルレー方、景保は将軍謁見を機に、商館長に就任する前はとに気付いたのである。彼は、商館長に就任する前はとに気付いたのである。彼は、商館長に就任する前はとに気付いたのである。彼は、商館長のスチュルレー方、景保は将軍謁見を機に、商館長のスチュルレー方、景保は将軍謁見を機に、商館長のスチュルレー方、景保は将軍謁見を機に、商館長のスチュルレー方、景保は将軍謁見を機に、商館長のスチュルレー方、景保は将軍謁見を機に、市館長のスチュルレー方、景保は将軍諸見を機に、市館長のスチュルレー方、景保は将軍諸見を機に、市館長のスチュルレー方、景保は将軍諸見を機に、市館長の大きの戦争や

の印刷については実物を見なければ何とも言えないとた。スチュルレルは、景保の質問に丁寧に答え、地図ト、日本の地図を彩色印刷することが出来るかを尋ねし、日本の地図を彩色印刷することが出来るかを尋ねし、日本の地図を彩色印刷することが出来るかを尋ねし、日本の地図を彩色印刷することが出来るかを尋ねし、日本の領土と諸侯の名前など、激動する欧州の情勢の国中ロッパナポレオンとその家族について、戦争後のヨーロッパナポレオンとその家族について、戦争後のヨーロッパナポレオンとその家族について、戦争後のヨーロッパナポレオンとその家族について、戦争後のヨーロッパナポレオンとその家族について、戦争後のヨーロッパナポレオンと

庫から持ち出し、長崎屋に持参したのであった。 半もある掛け軸を三本も抱えて、スチュルレルの部屋 と言われた景保は、伊能図の小図三幅を紅葉山文 伝わせての訪問である。数日前、「実物を見なければ… 伝わせての訪問である。数日前、「実物を見なければ… を訪ねた。一人では持てないので、部下の下河辺に手 を記れた。一人では持てないので、部下の下河辺に手

ルは驚いた。

未開地である東洋の、

その東端にある日

いきなり伊能図を目の前に広げられて、スチュルレ

本に西洋式の正確な地図が存在することがにわかには

信じられない。

「これは、日本国の地図ですね! いったい誰が作

たのですか?」

「まあ、私と私の部下です」

「それはお見それしました。素晴らしい!」

を伺いましたが、この地図をオランダで銅版画に印刷「お褒め頂き有難うございます。先日、活版印刷の話

できますか?」

答えた。

なければなりませんな」「もちろん、出来ますとも。ただ、大きいので縮小し

願いですが、お国に帰られましたら、この地図を四○「そうですか!」それでは幕府からオランダ国へのお

〜五○部印刷して日本に送って頂けませんか」

「それはまた、突然の話で理解に苦しみますが……。

もし、オランダで印刷するとなれば、この地図は私共

に譲ってくれるということでしょうか?」

先日、シーボルト博士に複写図のご提供を約束してい 「いえ、これは国禁の品ゆえお譲りは出来ませんが、

「ということは、この地図をシーボルトにも見せたの

ます」

ですね?」

「はい、別の場所で。グロビウスは大そう気に入っ

て、この地図を何としても複写するようにと、強く頼

まれました」

「それで、貴方は引き受けた?」

「はい。彼が余りにも熱心でしたので」

に依頼することが筋と考え、依頼を続けた 伝わっていないことに驚いたが、先ずは使節の代表者 景保は、シーボルトから上司のスチュルレルに話が

「複写した地図が完成した暁には必ず出島にお送りし

ンダに帰ったら活版印刷をして、私に送って下さいま ます。その代わりというわけではありませんが、オラ

すね」

景保からの思いがけない依頼に、スチュルレルは言

葉に詰まった。

「ウーム、即答は出来ませんな。 関係者とも協議をし

なければならないし」

「そこを何とか、商館長のお力で……」

景保は、スチュルレルの曖昧な返事に不安を覚えた

が、「商館長はきっと前向きに対処してくれるに違いな

い……」と信じて、部屋に広げた伊能図を巻き戻し

た。

憤懣やるかたない。シーボルトが医官と博物学の研究 に、「身勝手なシーボルトが、またワシに無断で!」と 他方、スチュルレルは、突然の話に面食うと同時 が、 はこれも無視。二人の関係は日毎に悪化を辿っていた という新たなルールを作ってみたものの、 や依頼等の文書は商館長とシーボルトの連名とする』 を進めるのかと怒りが収まらない。 の総督に報告をし、 ーボルトは何事をするにも商館長を無視してバタビア 受けて来日した自分とでは格が違う。 望されて軍に入り、バタビアのカペルレン総督の命を ランダ東インド会社の商館長と、オランダ国王から嘱 トの方が商館長を上司と思っていなかった。新設のオ 上司として、その役割はよく心得ていたが、 聞いており、 ぶ調査を任命されていることは、バタビアの総督から 商館長の方は、 今回の江戸参府ではそれが一段と顕著になってい 協力するようにとの指示も受けている。 何故、 相談などを持ち掛けていた。一 上司の自分を無視してこと 『総督への調査報告 したがって、シ シーボルト シーボル

> のであった。 上司のスチュルレルに話を通してからと手順を踏んだた。二人の険悪な関係を知る由もない景保は、先ずは

に加えて日本の文化や生活習慣さらに政治や軍事に及

れ、 ら地図が届いたら、 刷した銅版画の送付を頼み込む。 た。 者に配って、 に帰ったら四○~五○部の活版印刷をして……」と印 杯に開くことも叶わなかった。 軍謁見時に潜入した紅葉山文庫は狭くて掛け軸を目 1 たい、広い世界に目を向けさせ、 の伊能図を繋ぎ合わせて、存分に検分することができ の部屋を訪ねた。 商館長との面談を終えた景保は、その足でシーボル 景保はシーボルトに対しても、 旦巻き戻した伊能図を再び床に広げさせる。将 井の蛙状態に陥った日本人の目を覚まし いま製作中の世界地図と共に有力 シーボルトは笑顔で景保を迎え入 しかし、ここでは三幅 そして、「オランダか 激動する世界情勢か 改めて「オランダ

ゝ゛;`゛゛、 いい、 一周が長っ い。 ら取り残されないように、将軍や幕閣たちを動かした

い」とシーボルトに熱い口調で語った。

翌日の四月十日に、シーボルトの逗留延長を却下する旨の通知が届いた。シーボルトは頼みの島津重豪やが、幕府の態度は変わらない。当然のことであるが、が、幕府の態度は変わらない。当然のことであるが、かを聞き、猛烈な反対工作を展開したことは、将軍とみを聞き、猛烈な反対工作を展開したことは、将軍とその側近以外に知る者はいなかった。

こまでしなくても」と断ったが、徳内は頑として聞き行くと言う。シーボルトは高齢の徳内を気遣って、「そであることを確かめると、自分も小田原まで見送りにであるにとを確かめると、自分も小田原まで見送りにしている

滞在を終えて本石町の宿を出た。品川宿に差し掛かる四月十二日の朝、商館長らの一行は四十日間の江戸

ていた。重豪は寵愛する曾孫の斉彬を連れていて、十と、島津重豪と中津の老侯がシーボルトの見送りに来

をした。重豪は聡明な斉彬の教育に熱を入れていて、四歳になる斉彬もオランダ語でシーボルトたちに挨拶

江戸滞在中にシーボルトが最も信頼を寄せていた最蘭学やオランダ語も幼時から仕込んでいたのである。

原の宿に着くと、それまで大事そうに携えてきた荷物上徳内は、約束通りに小田原まで同行した。彼は小田

を手にシーボルトの部屋に入ってきた。

熱望していましたね。それを私は提供しようと思いま「ドクトル・シーボルト、あなたは北方領土の地図を

「おーッ、それは有難い! でも、何故その気に?」

す

入れなかった。

「ドクトルはかつて、 ヨーロッパの学会で私の研究を

発表しようと仰いましたね

「はい、北方領土の地図や資料は、 世界の注目の的 で

すから」

「私とドクトルとの連名で発表してくれますか?」

「もちろん、ファースト・オーサーはあなたですよ」

「それを約束してくれるなら、この資料を全部差し上

げます。ただし、発表は私の研究が先で、間宮林蔵は

後ですよ」

徳内は、自他ともに認める北方領土やアイヌ研究の

第一人者であったが、林蔵より自分の研究発表を優先 するようにと念を押す。シーボルトはそれを快く受け

ることになった。それらの資料は、すべて国禁の品

入れ、北方領土や樺太に関する資料が外国人の手に渡

小田原の宿まで足を運んだのであった。 であったので、徳内は危険な江戸を避けて、 わざわざ

> て択捉島で出会ったロシア人とはヨーロッパに行く約 徳内は、 若い時からヨーロッパの学問に憧れ、 カコ

束を交わしたこともある。しかし、七十二歳になった

いま、海外に出掛ける夢は潰え去った。そのような折

に持ち掛けられた「海外の学会で共同発表を」という 話に駆り立てられて、提唱したシーボルトに夢を託し

たのである。

翌朝、 徳内は山崎の三枚橋(現箱根町湯本)までオラ

別れたが、 ンダ使節の一行を見送り、 彼らはそれ以降、二度と会うことはなかっ 橋のたもとでシーボルトと

た。

七、 シーボルトらを陥れる罠

ど歓迎されていたにも拘わらず何故?」と腑に落ちな 江戸逗留の延長を阻止されたシーボルトは、「あれほ 日後であったことから、商館長の礼を失した行為が原日後であったことから、商館長の礼を失した行為が原因ではないかと推測した。スチュルレルは将軍に拝謁因ではないかと推測した。スチュルレルは将軍に拝謁因ではないかと推測した。スチュルレルは将軍に拝謁因ではないかと推測した。スチュルレルは将軍に拝謁とスチュルレルへの怒りをさらに募らせた。

彼は、

「形勢不利に転ず」

の第一

報が将軍謁見の数

めて、出島に送る作業に力を注いだ。
しかしシーボルトは、そのようなことで挫けることはなかった。逗留延長が叶わないのであれば、と開きに着くと、往路に手配していたコレクションを取り纏に着くと、往路に手配していたコレクションを取り纏いが、出島に送る作業に力を注いだ。

京都に着くと、シーボルトは御典医の小森肥後介に京都に着くと、シーボルトは御典医の小森肥後介に京都に調べてゆく。

大阪では門外不出の大坂城の絵図を入手、大坂の街がみや港についても詳細に調査した。とくに、木津川と安治川の河口には多種多様な船が来航し、中には中国船も見られること。その活況を川原慶賀にスケッチ国船も見られること。その活況を川原慶賀にスケッチであると日誌に書き残した。

庫津では町の賑わいに注目、人口は一万六千人にも及大坂から先は海路を進んだが、最初に立ち寄った兵

り組んでいたのである。 り組んでいたのである。 り組んでいたのである。 り組んでいたのである。 り組んでいたのである。 のにとを一切気にすることなく測量に没頭する。 音の形状、水深や潮の流れ等を克明に調査して、将 まの形状、水深や潮の流れ等を克明に調査しているの 深が大坂港より深く、ヨーロッパ船にも適しているの 深が大坂港より深く、ヨーロッパ船にも適しているの び、

船の数も多く大型船も停泊している。この港は水

バタビアのファン・デル・カペルレン総督や郷里の母島に帰り着いた。筆まめなシーボルトは、早速、島に帰り着いた。狭い出島を監獄のように忌み嫌って島に帰り着いた。狭い出島を監獄のように忌み嫌って

た。

に宛てて手紙を書いた。

一次一

しく、しっかり者なので母上にも気に入ってもらえるの十二月に日本人の女性と結婚する。彼女は大変愛らかったが、調査任務は大成功に終わり、とても満足しかったが、調査任務は大成功に終わり、とても満足しかったが、

と思うと記している。結婚の相手は其扇、お滝である

ことは申すまでもない。

商家、 ては、 るが、 取り揃えた。これらの品々は、 で及んでいる。 めたり作ったりした物品の特徴は大きく分けて模型 花壇をこしらえるほどの手の込みようである。彼が集 ションの内訳は美術工芸品、 タビアに送る船積みの準備に余念がなかった。 人(十二業種)が精巧に作られ、 手紙を書く一方で、シーボルトはコレクションをバ 人形類、 寺社、 サイズが二十五分の一に統一され、 とくに植物標本については船のデッキに特別な 橋はもとより金山(禁制)、 道具類の三つに分けられる。模型につい 人形については役人、商人、農民、 絵画、 道具類はすべて実物を 長崎に寄港したアレキ 動植物標本等であ 娼婦の館にま 武家屋敷や コレク 職

> と催促した。 が、 と認め、 ラネタリウムを今でもお望みなら送ってもよいが…… 複製図を約束した景保に宛てて手紙を認める。 気掛かりであった。そこで七月の初めに、 プを送る。それにかつて要望があった時計仕掛けのプ 江戸で提供した蘭領印度の図二枚の残りと数個 シーボルトは膨大なコレクションに満足していた 日本の正確な地図がまだ手に入っていないことが 約束した『例の地図』を早急に送って欲しい 日本地 彼は、 0 コッ 図の

月の初めに奉行便でシーボルトに送った。礼を述べ、蝦夷地の追加の地図を長崎に戻る通詞の吉雄忠次郎に持たせる。そして、『例の地図』については雄忠次郎に持たせる。そして、『例の地図』についてはがらいい、蝦夷地の追加の地図を長崎に戻る通詞の吉がが、戦夷地の追加の地図を長崎に戻る通詞の吉がが、

サンデル号に積み込まれ、

十月にバタビアに向けて出

東輔、 われているのでは……と疑いを持ち始めた 危惧し、 たちは、 漢字にはルビを振るように命じた。 にいそしんだが、景保は地名をカタカナで書き込み、 特徴である。 伊能図と呼ばれる地図には複写時の針孔があることが で黒く描いてゆく。大変手間のかかる作業であるが、 沿って穴をあけてゆく。 は部下の下河辺林右衛門が当たり、 写する作業に一層拍車をかけてゆく。 って朱を入れ、 した地図の下にもう一枚の和紙を敷き、 川口源次郎らが作業に没頭。 複製図はシーボルトに渡すためではないかと 公務というのも建前で、 四人の図工たちは寝る間も惜しんで作業 次いで海岸線と主な山川、 通り穴をあけると針孔に沿 景保個人の権限で行 それを聞いた図工 兀 伊能忠敬らが作成 作業の陣頭指揮 人の図工、 針で測量線 国境線を墨 尚 田

その後も繰り返し催促を受けた景保は、

伊能図を複

が、 無かったという。 られてきたので、 取り扱いに十分注意すること。 その手紙の中で、 勇んで、早速シーボルトに宛てて手紙を認める。 伊能特別小図と呼ばれる―が完成した。 に景保宛てて「地図は同封されていなかったが、 った。シーボルトは開封した手紙を何度も読み返した 島にいるシーボルトの手に渡ったのは六月の中旬であ ることを忘れないように」と念を押す。 ンダに帰ったら四〇~五〇枚、 太や千島列島を含む北海道の三枚である。景保は喜び の二分の一で、 四月中旬に、 日本の地図はどこにも見当たらない。 縦四尺強、 伊能図を複写した日本の正 狼狽したシーボルトは、 長崎奉行所に問い合わせても、 「私から得たことは誰にも他言せず、 横四尺弱、 そして約束通りにオラ 活版印刷をして私に送 日本の東西と樺 その手紙 大きさは小図 六月一九日 奉行便で送 確な地 何も 何処 が出 図

にあるのであろうか?」と問い合わせの手紙を送っ

た。

に浸りながら、早速、景保に宛てて礼状を認める。に帰省するという伊東玄朴に持たせたのである。弟子に帰省するという伊東玄朴に持たせたのである。弟子を別に届いた。景保は奉行便では不安なので、折よく佐賀に届いた。

が出来ると書き認めた。

には次のような注文を付けた。先ず、北を上にして描といた日本地図は、初めて『K.V.J(Kart Von Japan)』といた日本地図は、初めて『K.V.J(Kart Von Japan)』と世界的に見ても貴重な K.V.J はもう一枚作っておく必能があると熱く説く。そして気を強くしたシーボルーがあると熱く説く。そして、大胆にも、新たな地図では次のような注文を付けた。先ず、北を上にして描といた日本地図は、初めて『K.V.J な作るようにとして描いると熱く説く。そして、大胆にも、新たな地図では次のような注文を付けた。先ず、北を上にして描には次のような注文を付けた。先ず、北を上にして描して描いる。

奇麗な銅版画印刷にして希望の枚数を日本に送ることな港には錨印をつけること。そうすれば、オランダで要な山や川の名を書き入れ、大小の街道に加えて重要き、三枚ある伊能図を南北の二枚に纏める。さらに重

を作りましょうと承諾する旨の手紙を書き送ったのである。そこで景保は、シーボルトにご要望のたのである。そこで景保は、シーボルトにご要望のたのである。そこで景保は、シーボルトにご要望のたのである。そこで景保は、シーボルトにご要望のたのである。そこで景保は、シーボルトにご要望のたのである。そこで景保は、シーボルトにご要望のたのである。そこで景保は、シーボルトにご要望のたのである。そこで景保は、シーボルトにご要望のたのである。そこで景保は、シーボルトにご要望のたのである。そこで景保は、シーボルトにご要望のたのである。そこで景保は、シーボルトにご要望のためである。そこで景保は、シーボルトにご要望のためである。そこで景保は、シーボルトにご要望のためである。そこで景保は、シーボルトにご要望のためである。そこで景保は、シーボルトにご要望のためである。そこで景保は、シーボルトにご要望のまる。

掛ける。ところが高好は「端からあり得ない話、 は、 という。 も訊いてみたが、やはり奉行の高好が言う通りである ばず」と取合ってくれない。 図は国外に持ち出せない禁制の品であり、返答にも及 ンダ本国に持ち帰りたいと考えたのである。そこで彼 対しても優位に立てる。是か非でも手に入れて、オラ と日本との交易促進に役立つし、 保から伊能図の活版印刷を依頼されたスチュルレル の耳にも入った。 、たスチュルレルは、 江戸から すぐ狭い出島内に広がり、 新たに長崎奉行に就任した大草高好に相談を持ち もし、 出島に戻ると、早速、 幕府の決まり事であれば仕方がないと諦めて 日本の正確な地図が手に入れば、オランダ 「日本の正確な地図 江戸参府の折に、 シーボルトが地図を手に入れた 必要な調査に取り掛かっ 気心の知れた通詞たちに 商館長のスチュルレ [が届いた] という情報 西欧のライバル国に 書物奉行の高橋景 伊能

> ことを知った途端に、 た。彼は激情を抑えきれずに、シーボルトの部屋に押 積もりに積もった怒りが爆発し

「シーボルト、お前という奴は!」

し掛けた。

「突然、 何事ですか? そんなに取り乱して」

「ワシが、書物奉行と約束をした日本の地図を、

も横取りしおったな!」

「ええっ、それは誤解ですよ! 地図は私とグロビウス

の約束で手に入れたもの、決まっているじゃないです

か

「何を言うか!

江戸参府の折に、グロビウスはワシ

来ると返事をして、必要な手続きも踏んできたのだ」 に活版印刷ができるかと訊いてきた。そこでワシは出 「それは商館長への形式的なご挨拶でしょう。 勘違い

をしないで下さい」

「いや、グロビウスは幕府からオランダ国へのお願い

だとはっきり言っていた」

「そんなことを今更言ってみても、何の役にも立ちま

せんよ」

「いや、地図はオランダ国に送られてきたものだ。だ

から商館長のワシに渡しなさい」

「とんでもない、貴重な地図を手放せるものですか」

「返す気は毛頭ないのだな」

出した。

「もちろん、商館長とは関係ないことですから」

「であれば、 奉行所にすぐ返しなさい! お前が手に

入れた地図は禁制の品だ」

「ご冗談を! 苦労に苦労して手に入れた地図を、わ

ざわざ返せるものですか」

った。

シーボルトは鼻先で笑って、商館長を相手にしなか

憤懣やるかたないスチュルレルは、 自宅に戻ると羊

皮紙を広げて告発文を書き始める。「出島の医官である シーボルトは、禁制の品である日本の地図を隠し持っ

ています。出所は江戸の書物奉行で……」と事実を書

き連ね、オランダと貴国との友好関係を維持するため

に日本語に翻訳をさせて、匿名のまま長崎奉行に差し にも厳正な処分を願うと結んだ。そして、腹心の通詞

を介して、江戸幕府に送られた。 シーボルトを告発する書状は、 高好は、密告書を受 長崎奉行の大草高好

け取る前にも商館長から日本の正確な地図について相

談を受けている。その時は、よもやあるまいと思いな

幕府に報告していた。そして今度は、医官のシーボル がらも、「伊能図がオランダに譲渡される恐れあり」と

トが日本の地図を御書物奉行から騙し取ったという通 もはや疑う余地もないと高好は、「匿名では

報である。

て、密告書を江戸幕府に送り付けたのである。あるが、書状の信憑性は極めて高い」と意見を付記し

その部下、 崎奉行を通して、 の隠密たちに監視を指示した。 らの動向について、 ち出すか逐一報告せよ」と命じた。  $\vdash$ 村垣定行の主導で対応策を繰り出してゆく。 の見張りを強化し、具体的に何を手に入れ、 長崎奉行からの通報を受けた江戸幕府は、 さらにシーボルトの弟子や蘭方医、 通詞目付の吉雄忠次郎に「シーボ 腹心の部下である間宮林蔵や多く 同時に高橋景保と 。 先 ず、 勘定奉行 何を持 蘭学者 長 ル

穏の動きあり」という情報も、時を移さず家斉に伝えなった村垣定行は、元々御庭番の家柄の生まれであなった村垣定行は、元々御庭番の家柄の生まれであなかった。したがって、「シーボルトと高橋景保らに不なかった。したがって、「シーボルトと高橋景保らに不なかった。したがって、「シーボルトと高橋景保らに不なかった。したがって、「シーボルトと高橋景保を監視、監督することとシーボルトらの不穏な動きを監視、監督することと

ーボルトと景保らの行動を把握する情報収集に重きをきに計らえ」と軽くあしらわれた。そこで定行は、シている。しかし、家斉は殆ど関心を示すことなく、「よ

置くことにしたのである。

家斉がシーボルトらに寛大であったのは、将軍に就 にことが関与している。その間にオランダの言語や文 にことが関与している。その間にオランダの言語や文 にことが関与している。その間にオランダの言語や文 にことが関与している。その間にオランダの言語や文 にとが関与している。との間にオランダの言語や文 にことが関与している。との間にオランダの言語や文 にことはなく、親近感さえ抱いていた。

占拠しようと企てた。その後も浦賀や常陸の大津浜、八)に艦船のフェートン号を長崎港に潜入させ、出島をイギリスにあった。そのイギリスは、文化五年(一八〇むしろ将軍家斉の危惧は、近年、攻勢を強めている

に『異国船打払令』を発したところである。見せている。度重なる侵犯行為に対し、幕府は二年前は薪水の要求にとどまらず、幕府に開国を迫る動きも薩摩の宝島に出没して、薪水や食料等を奪取。浦賀で

イギリスの侵略行為に手を焼くのは日本に限らず、オランダも似た立場にあった。長崎港にフェートン号 ら執拗な砲撃を受け、都市を内陸部に移転せざるを得 ら執拗な砲撃を受け、都市を内陸部に移転せざるを得 り、幕府はオランダとの交流を一層密にする必要に 迫 り、幕府はオランダとの交流を一層密にする必要に 迫 られている。その辺の事情については定行もよく理解 られている。その辺の事情については定行もよく理解 られていたので、シーボルトたちを監視するにしても、 オランダとの友好関係を損なうような行為は避けてい オランダとの友好関係を損なうような行為は避けていた。

する将軍や幕閣に反し、大奥で権勢を振るう側室お美一方、イギリスやロシア等、海外からの圧力に苦渋

橋治済と結託した重豪の院政行為であった。

もない。 た。 将軍の岳父という立場を利用した悪行は枚挙にいとま らに半ば公然の抜け荷に薩摩藩の借金踏み倒し等々、 の豪奢な暮らしぶりや有力大名らを招いての饗応、 をも憎み嫌う理由は、 抱いてきた『正室茂姫とその父に対する憎しみ』がそ とがあった。彼女が将軍家斉の側室となったとき以来 留の阻止に成功した後も、 代の方はシーボルトらの動きに寛容ではいられなか 0 の岳父島津重豪と親しく、 を膨らませてゆく。その背景には、シーボルトが将軍 まま『シーボルト憎し』に繋がっていくのである。 お美代の方が、 シーボルトを危険人物と見做した彼女は、 それらにも増して許せないのは、 正室の茂姫はもとより茂姫の父重豪 幾つもあった。 強い繋がりを保っているこ シーボルトへの憎悪と警戒 俗称高輪御殿で 将軍の実父 長期逗 さ

\* できごと は、実権を掌握した治済にすり寄って、将軍家斉の

政 にまで口を出してくる。

る その裏では、 とどまらず、岳父の重豪の言うなりにもなってきた。 たりしている。 望を治済に伝えたり、 師を使って弟の中津藩主奥平昌高とも密に繋がってい 秘情報を父に漏洩するだけでなく、 なった茂姫が絡むことも多かった。 重豪の幕政への口出しについては、 その昌高は、 正室の茂姫が色濃く暗躍していたのであ 結果として将軍家斉は、 一橋家と親交を結び、 治済に父の暴挙悪行を黙認させ 気心が知れた奥医 茂姫は、幕府の極 将軍の御台所と 実父の治済に 重豪からの要

美代の方は虎視眈々と狙っていたのである。

が、重臣たちは重豪を責めるどころか、逆に教順を示たが、幕閣たちに重豪の悪行を糺すよう働きかけてたが、幕閣たちに重豪の悪行を糺すよう働きかけて

延長を後押したのも重豪であった。そのシーボルトの

って来る。その時には必ず尻尾を掴まえて……と、おあろう。側室のお美代が幾ら憤慨したところで、手も足も出ないのである。しかし、何時までも重豪の横暴足も出ないのである。しかし、何時までも重豪の横暴な行いが続くわけはない、何軍の岳父への忖度と三田の薩す者ばかり。恐らく、将軍の岳父への忖度と三田の薩す者ばかり。恐らく、将軍の岳父への忖度と三田の薩

間く。そして、腹心の桂川甫賢らを使って、彼の逗留 がぶれの大名とも親交を結び、現に欄癖大名と揶揄 を開いて、多くの門人を集めている。さらに、オラン を開いて、多くの門人を集めている。さらに、オラン を開いて、多くの門人を集めている。さらに、オラン される重豪と昌高父子は大森まで彼を迎えに行ったと される重豪と昌高父子は大森まで彼を迎えに行ったと

たくらみを体よく阻止したお美代の方は、以来、重豪

とシーボルトの関係を執拗に探っていた。

そんなある日、お美代の方は親しい奥医師の一人

「島津の老公の蘭癖は承知しておるが、何故、出島に

に、気掛かりなことを訊ねてみた。

来て日の浅いシーボルトに接近するのであろうかの

う ?

「はあ、よくは存じませぬが、巷間ではオランダとの

交易を狙っていて、その足掛かりにしようとしている

「清国との交易や抜け荷だけでは満足できぬというの

「はい、オランダとの交易も認めるようにと、上様や

幕閣に働き掛けていると聞きます」

か?

とか」

であればシーボルトより商館長に言い寄るのではない「けしからぬことをたくらんでおるな。しかし、それ

か?

「これは長老から聞いた話ですが……、お話してもよ

ろしいでしょうか?」

「遠慮などしなくてもよい、私はそなたたちの味方じえしい。し

お美代の方の力を借りてシーボルトの長期逗留を阻

や

んで以来、多紀派の奥医師たちは彼女との距離を縮

め、より多くの情報をもたらすようになっていた。躊

躇いながらも披露した奥医師の話は、概ね次のような

ものであった。

チングが説く世界情勢や海外の交易の有様に感動し、国を廃止しようと画策したことがある。重豪は、ティ国を廃止しようと画策したことがある。重豪は、ティー―今から四十年も前になるが、若い重豪は当時の

前に、 た夢を、もう一度咲かせようとたくらんで、シーボル 交を結んでゆく。そのずば抜けた能力は、かつてのテ るだけでなく、親蘭大名や権力者たちとも精力的に親 ってきた。彼は、医師や学者として多くの弟子を集め た。そこに、シーボルトという有能な人物が日本にや 易をすべき」という考えを捨て切れずに温存してき き以来、「オランダにとどまらず海外の多くの国々と交 も失脚して計画はすべて水泡と帰した。重豪はそのと 船技師を日本に呼び寄せようとした。 熱心であった意知はバタビアに大型帆船を発注し、造 意次とその息子で若年寄りの意知も絡んでいて、特に 意見に賛同したからである。 日本も早く海外と交流して、 ィチングを彷彿とさせるものがあり、 意知は殿中で刺客に襲われ、その二年後に意次 その計画には老中の田沼 国を富ますべきだという しかし、その直 重豪は諦めてい

りほくそ笑む。

「聞き捨てならぬ話じゃ。幕政の根幹にもかかわる大

事ではないか!」

お美代の方は、「ついに馬脚を現しおったな!」とひとた。もはや重豪が憎いとか、シーボルトが嫌いなどとに、出島のシーボルトが、禁制の伊能図を書物奉行のに、出島のシーボルトが、禁制の伊能図を書物奉行のに、当島のシーボルトががないる場合ではなかった。そこに、当時代は、事の重大さに眼を剥き、呻くように言っお美代の方は、「ついに馬脚を現しおったな!」とひと

く蘭方の医者や学者、さらに欄癖大名たちも絡んでいの景保も片棒を担いでいるとなれば都合がよい、恐ら禁に触れる大罪を犯している。さらにオランダかぶれ禁に触れる大罪を犯している。

お美代の方は好機到来とるに違いない……。

の奥医師にシーボルトとその仲間たちの情報をさらにお美代の方は好機到来とばかりに勢いづき、出入り

トに接近している……。

びつきはより強くなり、彼らの主張に賛同する旗本や 手にしてくれなかった老中や幕閣もシーボルトと景 幕臣たちに受け入れられてゆく。そして、かつては相 に逆らう危険分子」と見做して警戒する考えは多くの と交易を望む親蘭大名や蘭方医・蘭学者たちを 大名も増え始めた。とくに重豪を筆頭に、海外の国々 の奥医師と、重豪らを追い落としたいお美代の方の結 集めるように命じた。蘭方の医術を脅威とする多紀派 「幕政

## 【参考文献と謝辞】

は、 号・三一号)を参考に稿を進めた。 諸考察を中心に─(1)および(2)』(鳴滝紀要第三○ 関係―ドゥ・スチュルレル「江戸参府日記」に基づく オランダ商館長ドゥ・スチュルレルとシーボルトとの 秋社)については前回述べた通りである。 加えて今回 トの情報を参考にさせて頂いた。中でも、秦 **ノンフィクション『文政一一年のスパイ合戦』(文芸春** 本稿の執筆に当たっては、多くの出版物や web サイ 横浜薬科大学の梶 輝行教授の論文『江戸滞在中の 新二氏の

梶教授には、心より謝意を表したい。

りは看過できない」と考えるようになってゆく。

〈以下、次号〉

愛する将軍家斉も、次第に「異人との行き過ぎた繋が

視するようになってきた。もちろん、お美代の方を寵

保、さらに重豪らの開国に繋がりかねない行動を危険

2023年12月